

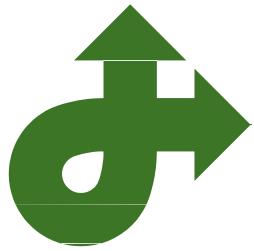
87th–88th

新制作
SHINSEISAKU

2025
会報

新制作協会

vol.82



88回展に向けて 委員長 西村俊夫

〈新しい空間と新しい意味をつくる〉

新制作展は今年で88回展になります。新制作協会マークは、創立会員の猪熊弦一郎氏と脇田和氏により考案されたもので、マークの矢印は向上と前進を表します。この向上と前進の精神は、今日の新制作展にもしっかりと受け継がれています。

現代社会には解決の難しい問題が数多く存在します。そして、それらは複雑に絡み合っています。それを解くには様々な思想や手法で多方向から取り組む必要があります。他の事柄と関係を持ちつつも独自に中庸の答えを導き出す思考も有効な方法であると考えられます。本来的に美術はそういう立場にある存在であると思います。美術は、絶対的な答えを導き出す活動ではなく、新しい意味や創造性を追求する活動です。観る人に癒しや共感を提供し、多様性を大切にする活動です。新しい可能性を追求する美術は、人間らしさを高める力を持っています。

作品を作る活動の制作プロセスに特別な意味と価値があります。そのプロセスも多様です。構想から完成までのプランをしっかりと定めて、そのプラン通りに制作活動を展開させて完成に至るという制作プロセスもあります。ある造形行為から立ち上がり、行為を進める中で作品が変容して行くという制作プロセスもあります。また、制作プロセスは問題解決と問題発見の方法でもあります。いずれにしても、制作プロセスの多様性が美術の特徴の一つであると思います。

新制作協会は絵画部、彫刻部、スペースデザイン部の3部で構成されています。新制作展では、現代のアートの状況を反映した挑戦的な作品や日常的な生活行為の延長から生まれた作品など、多様な作品が展示されます。そこでは、鑑賞者と作品との間に新しい空間と新しい意味がつくり出されます。多くの方の多様なかたちでの参加を期待します。



第88回新制作展 “The 88th SHINSEISAKU Art Exhibition”



第88回新制作展は下記の日程を予定しております。

国立新美術館
(The National Art Center, Tokyo)

2025年
9月17日(水) - 9月29日(日)
休館日: 9月24日(水)



2025年度委員
(代表委員会)
委員長 西村俊夫 (SD部)
副委員長 木嶋正吾 (絵画部) 岩間弘 (彫刻部)
代表委員
●絵画部 渡邊有美 緒方和美 菅沼光児 平田智香 片山裕之
●彫刻部 河西栄二 牧野未央 森智之 香取宏幸 笠井利彦
●SD部 金子武志 雨山智子 二井進 野口真理
(合同委員会)
●会計委員会 ●図録委員会 (図録/広告)
●美術館担当委員会 ●広報委員会 (広報・PR/会報/HP)
●受賞作家展委員会 ●慶弔委員会 ●美術団体懇話会

各部より

絵画部 渡邊有葵

ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）により世界の情報を得やすくなり便利になりました。再生回数や登録者数、高評価数をきっかけに興味を持ち、閲覧履歴を元に自動的にコンテンツをおすすめされるので、情報が自然と広がります。情報の受け止め方や価値基準の変化のスピードに翻弄されつつも、それを楽しみながら自己表現を模索していける今日この頃です。

先日、バイクに乗ったのですが、キックでしかエンジンをかけることができない車種なので、特に冬はなかなかかかりません。厚着だとキックの強さとタイミングが微妙にずれてしまうのでダウンジャケットを脱ぎ、身体に染み付いている感覚を頼りに50回ほど渾身の力を込めて、ようやくかかりました。その時の達成感と充実感、額に汗を浮かべながらTシャツ1枚になって感じる真冬の空気は、いつも以上の清々しさがありました。制作も同じようなことが言えそうです。手を動かすことで体が記憶している身体感覚の蓄積と、日常感じる些細な感動をきっかけにして描くことが大切だと強く思います。

10年後、どのような世界情勢になっているのか想像がつかない時世ではあります、今を生きている身体感覚と、それぞれの感動を作品という形で表現していただけたら幸いです。魂を感じる作品を楽しみにしています。



彫刻部 河西栄二

「彫刻とは何か」土や木、石などの素材と関わりながら自問自答し制作した各自の現在の精一杯の作品が、会員協友一般の区別なく一堂に会す、今年も新制作展がそんな空間になることを願っています。

昨年開設された「35³ – サンゴーキューブー」部門も、彫刻表現のチャレンジの場として定着してきました。今後も新たな表現を期待しています。

応募料無料とデータ審査は継続です。一般公募部門と35³部門、それぞれ3点、合計6点応募可能です。

また88回展から入選後の出品料を改定します。一般公募部門は3点まで20,000円（35歳以下3点まで13,000円）、35³部門は3点まで13,000円（35歳以下も同額）です。ご理解ご協力をお願ひいたします。詳しくはHP応募規定をご覧ください。

審査は彫刻部全会員で担当し、入落審査は画像データ審査、受賞審査は会場展示作品の実物審査を行っています。

オープニングトークは受賞者、新会員へのインタビュー、ギャラリートークは「新制作展の彫刻に触れる 2025」を開催します。作者のトークや彫刻作品に触れながら鑑賞できる特別な機会となります。皆様のお越しをお待ちしております。



スペースデザイン部 金子武志

AIの話題が毎日のようにメディアを賑わせています。膨大な情報から最適解や無限のバリエーションが瞬時に生まれ、今後私達はどう歩んでいくのか気になります。そんなAIとは裏腹にリアルな「モノ」とじっくり向き合いたいという欲求は以前より増しているのではないでしょうか。テーマヒマかける事や、そのプロセスにも多くの関心が注がれています。新制作展の来場者と接する度にその傾向を強く感じると共に、沢山のリアルに会える「場」の提供は今後の私たちの大切なテーマの一つだと感じています。

来場者の興味は作品だけではありません。それが誕生した背景、発想や制作のプロセスへの関心がとても高いようです。我々開催する側もアートを更に身近に感じてもらえるような工夫がこれからも必要だと思っています。

展覧会初日の「オープニングトーク」や、会期中開催の企画イベントを通じて作家の創作プロセスが共有され、アートへの親和性が更に高まることを期待します。展覧会をフォローするメルマガ「SD通信」では会員の作品と自身の創作のイズムを紹介、SD部の多様性を知る機会になるでしょう。協会ホームページからは是非ご覧ください。それでは今年も国立新美術館でお会いしましょう。



第87回新制作展

審査陳列報告

絵画部

審査陳列委員長 金本啓子

第87回新制作展絵画部への応募者は340名、総搬入点数673点でした。昨年より6名増加、20点の減少です。

今年は仲間を“育てたい”との思いを胸に、丁寧かつ厳正な審査の結果、初入選37名と2点入選29名を含む計295名324点の入選を決定しました。後日、入選作品と会員作品の展示後に協議した結果、新作家賞14名と絵画部賞7名、SONPO美術館賞1名を選出し、新会員7名を迎えました。

そして、2点入選作品の上下二段掛け以外は一段掛け展示で、新制作絵画部らしい充実した美しい空間が実現したと、自負しています。それから、本年3名の遺作は、敢えて遺作コーナーを設置せず、従来のほぼ定位置に展示しました。来年から故人の作品がこの場に無いことを思うと、寂しさ以上に故人の作家力の偉大さを痛感し、感無量で展示会場に佇んでしまいました。

また、カンボジア国籍の2名がデータ部門で入選されました。絵の具の扱いやモチーフが独特で新鮮だと思いながら、会場で拝見しました。なお、第88回展からは、海外在住の外国籍の方だけでなく、日本国籍の方もデータ応募が可能になります。楽しみです。

彫刻部

審査委員長 柴田正徳

彫刻部は2020年の休会を経て、翌年に写真審査を選択し再開してから4回の展覧を行いました。当初の緊急避難的な状態から、毎年慎重に議論を重ね、続けています。出品者の方たちの心配と負担が増えないように毎回十分な時間と、手間をかけ（現在のデジタル環境を最大限利用して）行っていることを理解してください。画像の中の立体と対峙し、以前にも増して各出品作品を感じ思考する事の幅は増えたと言えます。そして何よりも審査する側も真剣勝負である事は依然と少しも変わらないであります。第88回展の会場に大いなる作品達が集まることを期待します。

陳列担当チーフ 岩間弘

第87回展の彫刻部の展示は、すっきりして見やすいとか、以前の感じと違うとか人により感想は様々でしたが、暑かった夏のせいか会員の不出品が多くなったことも関係しているように思われました。

そんな中、今回2回目となる、限られた空間での新たな彫刻表現を探るというサンゴーキューブの展示は大きな作品とのメリハリを生み、新たな空間を作っていて良かったと思います。

一点一点の作品が見やすく、リズムを持って展示され、美しい風景のような空間を作れたら、と思い願っています。

スペースデザイン部

審査委員長 伊藤哲郎

私見ですが毎年の審査では、それぞれの応募作品に面対しながら、その作品の発想や制作過程を勝手に想像して追体験するような場となっています。自分の制作体験を通して、懐かしさや発見の高揚感、行き詰った閉塞感などが再現されるのですが、中には想いも依らぬ取組や効果を発現した作品との出会いがあります。去年は70点の応募があり、全部見終わるとぐったりしますが、どれもが自分の作品であったかのような錯覚を持ちます。結果として評価しなくてはいけないが、とにかく審査する側にも貴重な体験の場であり、自己の制作を省みて鍛錬する場ともなっているようです。評価する人も評価される人も、共に途上の表現者に変わりはありません。

陳列委員長 藤原郁三

ようやくコロナ禍以前の展示風景がもどってきたように感じました。相変わらず、作品の小型化はさけられませんが、これはむしろ時代の傾向かもしれませんね。一方で応募作品の質にバラつきがもどってきて、互いの作品がケンカしないよう陳列するのに苦労しました。でも、作品の質が平均化するより、逆に返って良かったかと思います。特に宙吊り作品は視覚的に空間に影響を与えるので、場所の選定が難しいのですが、うまくいけば展示空間にメリハリが付き、スペースデザインならではの演出が出来ます。その点今回は苦労のしがいがありました。



新会員紹介

絵画部



和歌山県生まれ
2007年 第71回新制作展 初入選
2016年 武蔵野美術大学造形学部
通信教育課程卒業
第85回・第86回新制作展
新作家賞受賞

妹背百代

初めて国立新美術館で自分の作品を目にした時の感動は忘れることなく、一瞬の佇まいを追いかけて描いてまいりました。先生方諸先輩方のあなたが指導に感謝いたします。向上と前進を目指さらなる研鑽を続けてまいりたいと思います。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。



1971年 東京生まれ
2010年 第74回新制作展 初入選
第84回新制作展 新作家賞受賞

雄鹿靖二

登山が好きで山や森で見て感じた事を絵にしております。まだまだ未熟者ですが、会員になった以上は新制作協会会員の名に恥じぬように頑張っていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



2011年 第75回新制作展 初入選
以降毎年出品
第79回新制作展 絵画部賞
第81回・第84回新制作展 新作家賞

奥田善章

若い頃から線画が好きで、少年雑誌の挿絵や劇画、似顔絵とかを写して暇さえあれば描いていたように覚えています。第87回新制作展にて会員に推挙頂き、光栄に感じこれからも線画を続けられたらと想います。



1947年 東京都生まれ
1970年 女子美術大学芸術学部
洋画専攻卒業
1970年 第34回新制作展 初入選
第69回新制作展 新作家賞受賞
第73回・第84回新制作展 絵画部賞

小浪春枝

身近な大切な形、島の美しく力強い植物や風景、記憶の中の景色など、自分なりの表現で、軽やかで、伸びやかな画面にしたいと制作してまいりました。この度、新会員に推挙していただきありがとうございます。今後ともよろしくお願ひ致します。



2009年 京都精華大学芸術学部
造形学科洋画コース卒業
2023年 昭和会展 入選
第84回・第85回・第86回新制作展
新作家賞受賞

小松隼人

学生の頃に難しく考えてしまい描けなくなっていた絵を、もう一度好きなように描いてみようと選んだ場所が新制作展でした。特別な力もなく“頑張って描く”のみでしたが、それでも評価して頂けて自信になりました。



千葉県野田市生まれ
1980年 武蔵野美術大学研究課程修了
1982年 グランシエール留学(仏)
2003年 損保ジャパン美術財団
奨励賞展秀作賞
第79回新制作展 新作家賞

滝田一雄

私にとって新制作は羅針盤的な存在です。独りよがりにならない為の目印、その枠の中に身を置き自分を客観視することは大切な年中行事です。



1945年 東京都生まれ
1999年 第62回新制作展 初入選
第82回・第84回新制作展
新作家賞受賞
日本美術家連盟会員

武田雪枝

この度、新会員に推挙頂きまして心より感謝申し上げます。毎年、自分の作品に迷いを感じながら取り組んできました。然し、諦めずに今まで継続してこれたこと諸先生方のご指導のおかげと感謝しております。これからも、新制作の会員として恥じないように一層精進したいと思います。どうぞ宜しくお願ひ致します。



1977年 大阪府堺市生まれ
2000年 東京造形大学造形学部
美術専攻美術II類(彫刻)卒業
2000年 第64回新制作展 初入選
2003年 東京造形大学研究生修了
第85回・第86回新制作展
新作家賞受賞

稻角新平

彫刻の制作に没頭し、日々研鑽を重ねる。ひたすら良い作品を生み出すことだけにエネルギーを注ぎ込む。この時間だけは紛れもなく自分が本当の意味で「生きている」と思わせてくれる。彫刻は私の人生そのものなのだ。



1957年 福井県旧武生市生まれ
1981年 富山県井波木彫刻
工芸高等職業訓練校卒業
2007年 新制作展 初入選
第82回・第86回新制作展
新作家賞受賞

河村幹夫

40年ほど前初出品して以来、厳しく優しく励まして下さった先生方、会員に推挙いただき有難うございます。新制作のマークに込められた「向上と前進」を忘れずに、純粋な心で素材に向き合い自分の木彫刻で表現します。今後とも宜しくお願ひ致します。



1991年 東京都生まれ
2011年 第75回新制作展 初入選
第83回・第86回新制作展
新作家賞受賞

山崎明史

会員にご推挙頂き、心より御礼申し上げます。新制作協会への入会を大変嬉しく思い、この新たなステージに対して気が引き締まる思いです。新しい環境での挑戦を通じて、自分なりの空間表現を一層深めていきたいと考えています。



カット 荒井茂雄

第87回新制作受賞作家展

新制作展では、優秀作品に協会賞、新作家賞を授与し、受賞者には、当協会各部主催の受賞作家展を企画しています。
第87回展の新制作受賞者（協会賞・新作家賞）の
展覧会が開催されました。



賞牌 《ヒノキのかたち》

受賞者に向けて

賞牌のタイトルは「ヒノキのかたち」です。檜材の色合いや柔らかい質感を生かした立体にしようと思いました。台座には、細いスリットを多数入れてあります。フォルムのイメージの源泉は、新制作協会のシンボルマークです。マークの矢印が表す向上と前進の精神を表現しようと思いました。様々な材料から様々ななかたちが生み出され、そのかたちはいろいろな意味を持ちます。そのことがとても重要なことだと思っています。

スペースデザイン部

西村俊夫

絵画部

シロタ画廊

2025年2月3日（月）－8日（土）

五十嵐学、岡田峰子、春日佳歩、神田恭子、北村多希子、熊谷美雄、中川久、能勢まゆ子、芳賀徹、荻野谷弘子、浜本忠比古、平川みき子、平松幸雄、山口蒼平



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



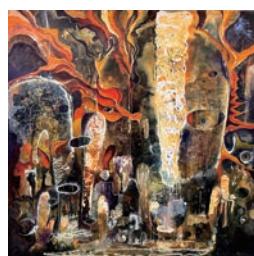
11



12



13



14

1. 五十嵐学 《circumambience vi》 P60号
2. 岡田峰子 《いつもの街》 F60号
3. 春日佳歩 《私の日常》 F50号
4. 神田恭子 《時-with the beginning》 S60号
5. 北村多希子 《ぶるんIII》 F60号
6. 熊谷美雄 《Pink Lady》 130 × 90 × 15cm
7. 中川久 《晩景》 F60号
8. 能勢まゆ子 《巡る日》 S50号
9. 芳賀徹 《revial》 F50号
10. 荻野谷弘子 《Alice,NYへ行く》 S60号
11. 浜本忠比古 《休息》 S50号
12. 平川みき子 《樹精》 F50号
13. 平松幸雄 《雪の木曾川》 F50号
14. 山口蒼平 《解放》 S60号

彫刻部

ギャラリーせいほう
2025年2月3日(月)
- 8日(土)

有賀也寸志、荻野和彥、
加藤有造、櫻井昂、
西井武徳、松原賢典



15



16



17



18



19



20

15. 有賀也寸志
《Alice2024 原型》
W54 × D42 × H89cm FRP、他
16. 荻野和彥
《コモリンの風》
W50 × D100 × H160cm 樹脂
17. 加藤有造
《孤高の群礁》
W35 × D23 × H42cm 鉄
18. 櫻井昂
《みのり》
W60 × D45 × H55cm 陶土
19. 西井武徳
《HANAUTA》
W60 × D50 × H100cm テラコッタ、銀杏
20. 松原賢典
《エリア180》
W50 × D50 × H250cm 陶、鉄、石

スペースデザイン部

建築会館ギャラリー
2025年2月2日(日) - 8日(土)

赤間洋子、石田純之助、井上国明、吉田桃香

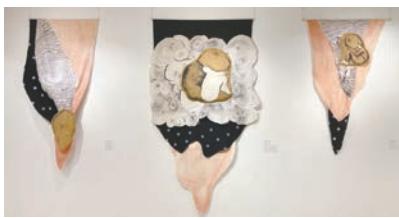
21. 赤間洋子
《邂逅》
W90 × H270cm 麻生平、インド藍染
22. 石田純之助
《テンセグリティー (作品02)》
W300 × D90 × H150cm
鉄、ステンレスワイヤー、ターンバックル、カラビナ、アルミスリーブ
23. 井上国明
《生命根源シリーズ CUBE 2》
W35 × D35 × H27cm 陶器
24. 吉田桃香
《「大丈夫」(左作品)
W112 × D3 × H180cm 縞布
《まだ優しい気持ちになれる》(中央作品)
W150 × D4 × H250cm 縞布
《いってらしゃい!》(右作品)
W90 × D3 × H180cm 縞布



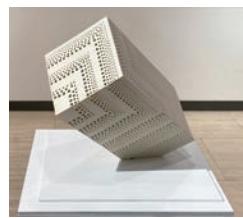
21



22



23



24

巡回展開催案内

新制作展は東京の国立新美術館での展覧会を終えた後、京都と名古屋で巡回展を開催しています。京都展は2020年リニューアルオープンした京都市京セラ美術館にて、名古屋展は愛知県美術館ギャラリー（愛知芸術文化センター8階）にて、どちらも3部合同での開催です。全ての作品が巡回するわけではありませんが、国立新美術館とは違った作品レイアウトや美術館独自の採光、天井の高さの違いなどによる作品の見え方の変化など、それぞれの作品をより深く味わえる機会にもなっています。紅葉の美しい晩秋の京都、イルミネーションに飾られた年末の名古屋へも、ぜひ足をお運びください。

「第88回新制作展 京都展」

会期：2025年

11月4日（火）－9日（日）

会場：京都市京セラ美術館



京都展 展示風景

「第88回新制作展 名古屋展」

会期：2025年

12月23日（火）－27日（土）

会場：愛知県美術館ギャラリー



名古屋展 展示風景

表紙作品



久保利一 《garden—遙か彼方への彷徨—》

第87回新制作展出品

2024年 W85 × D50 × H115cm

gardenはいつの間にかどこまでも伸びる木の枝や根、覆い繁る草や花で放置するとジャングルになりそうな生命力の溢れる空間です。いわば人と自然の営みがせめぎ合う境界域なのではと。幾億年ものこの星が重ねてきた歴史との小さな接点かもしれないのに普段はあまり意識できません。この星は70%が海、その海へと陸地から小さな船で漕ぎ出したらあっという間に大自然に呑み込まれてしまい、境界のない海原を彷徨する船にこの先どこへ行くのかと問いかけてきます。

その問い合わせに答えるイメージを粘土で形にしています。言い換えれば僕らと地球が継続していく関係性の形象化の試み。僕が使うテラコッタの粘土もこの星の核である岩石が雨風などで風化してきた足元深く地層に眠る賜り物。太古の時代に掘った穴で焚火の後に周りの土が硬く焼き締まり水が漏れない素焼や陶を発見した時からこれまで、粘土は多様な使われ方や多彩な創造が繰り広げられてきました。テラコッタの制作プロセスでは粘土に含まれる水分量で硬さを自在に調整しながら造り徐々に硬くしていき乾燥させ窯で焼きます。火をくぐることで質的変化を遂げた粘土は金属や石のような実材になります。先人たちが粘土を発見した瞬間の感動には及ばないかもしれません、日々粘土と対話しながらその追体験を楽しんでいます。

訃報 (2025年3月現在)

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福お祈り申し上げます。

五十嵐芳三 氏

彫刻部会員

2025年
3月8日 逝去
(享年98歳)



麦倉忠彦 氏

彫刻部会員

2025年
1月26日 逝去
(享年89歳)



森 史夫 氏

SD部会員

2024年
9月14日 逝去
(享年86歳)



編集後記

未曾有の数年を乗り越え、六本木の会場にも沢山の来場者が訪れるようになりました。インパウンドの影響か、チャリティー作品を母国に持ち帰りたいと手にする海外の方が印象的でした。小さなきっかけが日本の公募団体展を知っていただく機会に繋がることを願います。今号もお忙しい中、原稿執筆をお引き受けくださいました方々、そして「見やすく、読みやすい」紙面の編集にご尽力くださったSHIMA ART&DESIGN STUDIOの皆様におかれましては心より感謝申し上げます。

(岡本)

新制作協会事務所

〒160-0022

東京都新宿区新宿6丁目

28番10号 大阪屋ビル 202号

TEL : 03-6233-7008

FAX : 03-6233-7009

Mail: webmaster@shinseisaku.net

www.shinseisaku.net

発行 新制作協会

発行日 2025年5月

監修

西村俊夫

企画・編集・制作

広報委員会広報誌編集委員会

小島隆三、高橋正樹、新実正樹、

土井宏二、岡本泰子

デザイン

SHIMA ART&DESIGN STUDIO



新制作協会



新報誌バックナンバーページ